



授業を科学する： 授業分析と改善

専門職としての「授業力」を磨くための
実践ガイド

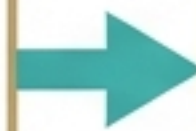
教員の資質向上は「責務」である

教員一人一人が、その職は高度に専門的なものであり、国家社会の活力を作り出す重要な職であるとの誇りを持ちつつ、高い志で自ら研鑽することの重要性が改めて認識されるようになってきた

—— 文部科学省「教員の資質能力の向上について（中間まとめ）」（2015年7月）

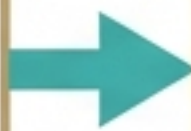
高度な専門職

(Highly Specialized Profession)



「授業力」の向上

(Improvement of Lesson Power)



授業改善と分析

(Lesson Improvement & Analysis)



「ただ観る」から「記録する」へ

受動的な参観 (Passive Observation)

漠然とした印象しか残らない

主観的な記憶にとどまる

能動的な記録 (Active Recording)

教育的な意味を見いだす

事実に基づいた客観的分析

Key Insight

観察の視点：「自分であればどうするのか」

授業分析は「記憶」ではなく「記録」から始まる

授業分析のための6つの資料

事実を再構成するための客観的材料



視点1：自己評価と他者評価のギャップ

観点	評価項目	自己評価 (授業前・後)	他者評価 (参観者・学習者)
教師の 意図	予想される反応を考え、 それに対応した手だてを 準備した		
	児童は何を全う考え、そ れ対象を準備した	予想される反応を考 え、それに対応した手 だてを準備した	
	教師ユニー、対応を行わ れ、指導や指導をさうこ と		
学習者	児童は内容を理解しよう と取り組んでいた		児童は内容を理解しよ うと取り組んでいた
	児童は内容を理解しよう 取り組みがい		
	児童は内容を理解しよう 守りたける		

分析のポイント

- 「教師の意図（準備・指導）」と「学習者の受け止め（理解・態度）」を比較する
- ズレがある箇所こそが、授業改善のポイントとなる

視点2：多視点映像記録の活用

指導者の表情・動き



教室全体の雰囲気

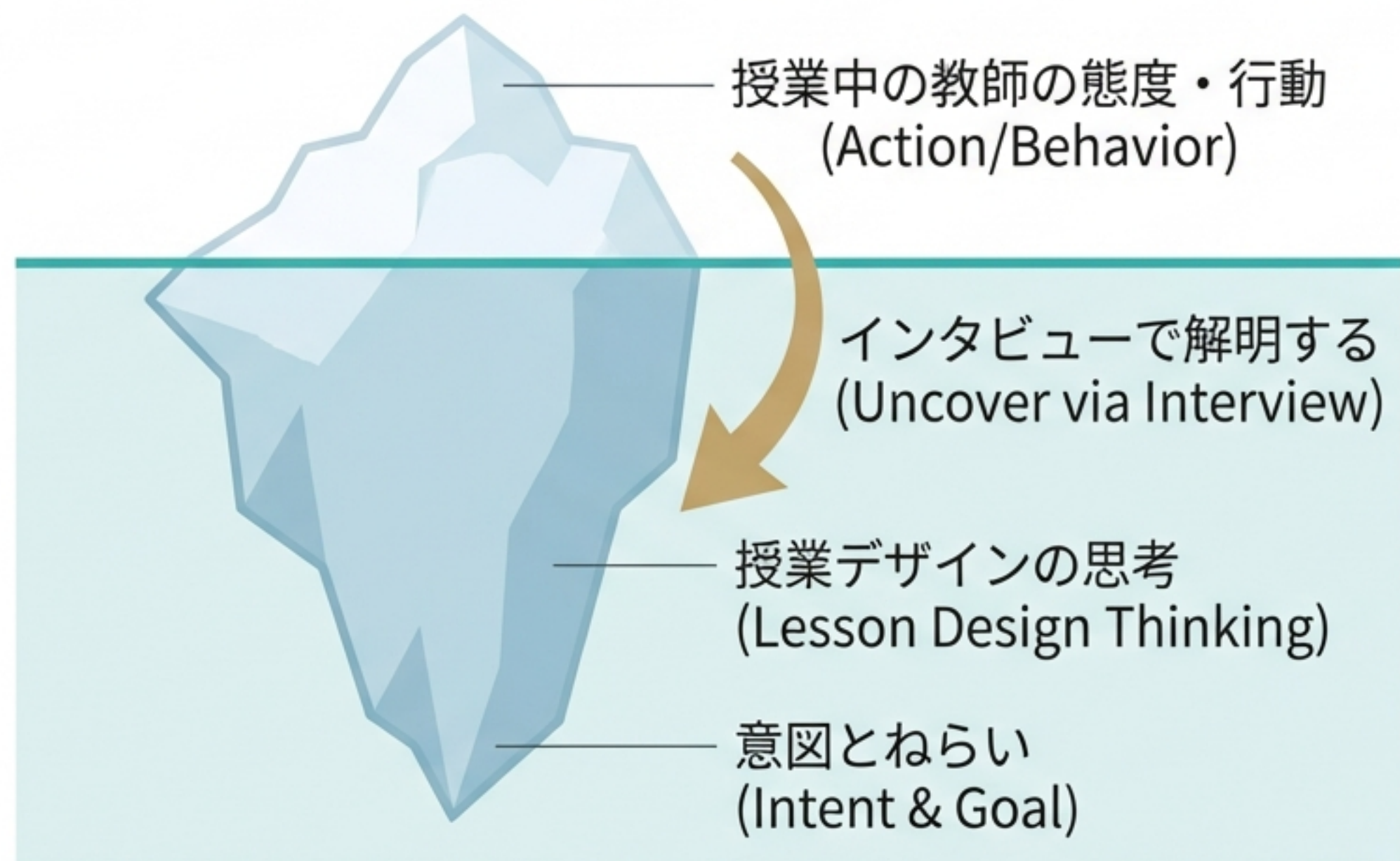
教室全体の雰囲気

学習者の反応・手元

1. 非言語情報の捕捉（Non-Verbal Capture）：音声記録では落ちてしまう表情や反応を記録する。
2. デジタルアーカイブ（Digital Archive）：何度でも見返し、事実を客観的に検証できる。

視点3：オーラル・ヒストリー（インタビュー）

「なぜ、そうしたのか？」—授業デザインの思考を掘り起こす



授業後のインタビューにより、映像だけでは分からない教師の意思決定プロセス（思考）を言語化し、事実（映像）との整合性を検討する。

視点4：参観者による観察記録

「学校教育実習Ⅰ」(紙筆型課題).....		月	日()	頁数
＜	＞	学習能力【E	】en【	】
クラス【	】科目【	】単位【	】授業時間【	】
時 間	教 師 行 為 (態度、印象、指示、対応、評価等)	予 定 の 学 習 行 為 (実習:2024.9.9, 9-10+11時)		

「教授行為」と
「子どもの学習行為」
を並行して記録する

記録の役割

映像では捉えきれない「教室の雰囲気」や「即時的な反応」を記述する。

必須のペア資料

観察記録は「学習指導案」とセットで活用する。

- ・指導案（計画）vs 観察記録（事実）

2つの分析アプローチ



定量分析 (Quantitative Analysis)

頻度・持続時間・割合

集団全体 (The Whole Group)

統計量 (Statistics)

客観的な数値による示唆



定性分析 (Qualitative Analysis)

記述・描写・順序性

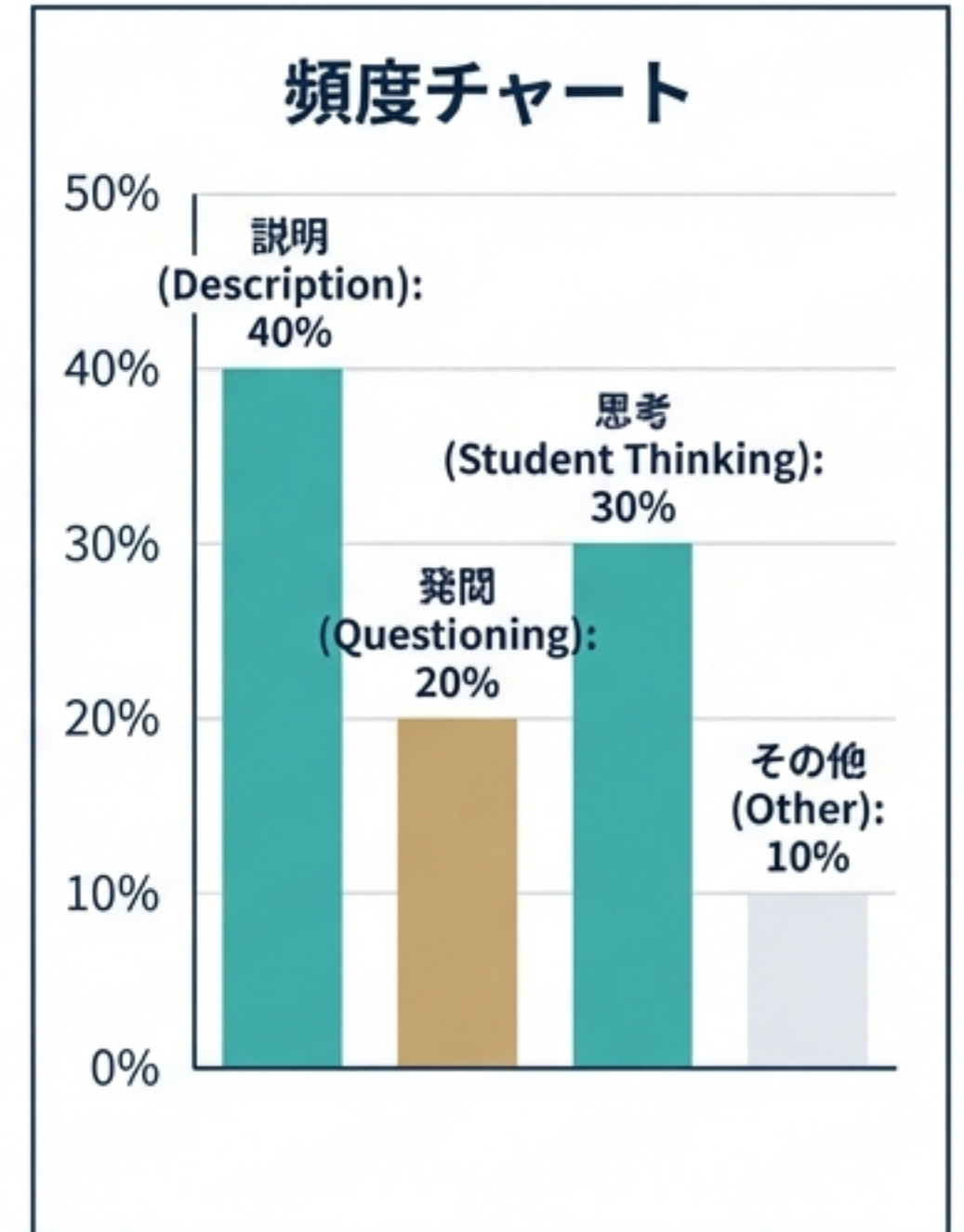
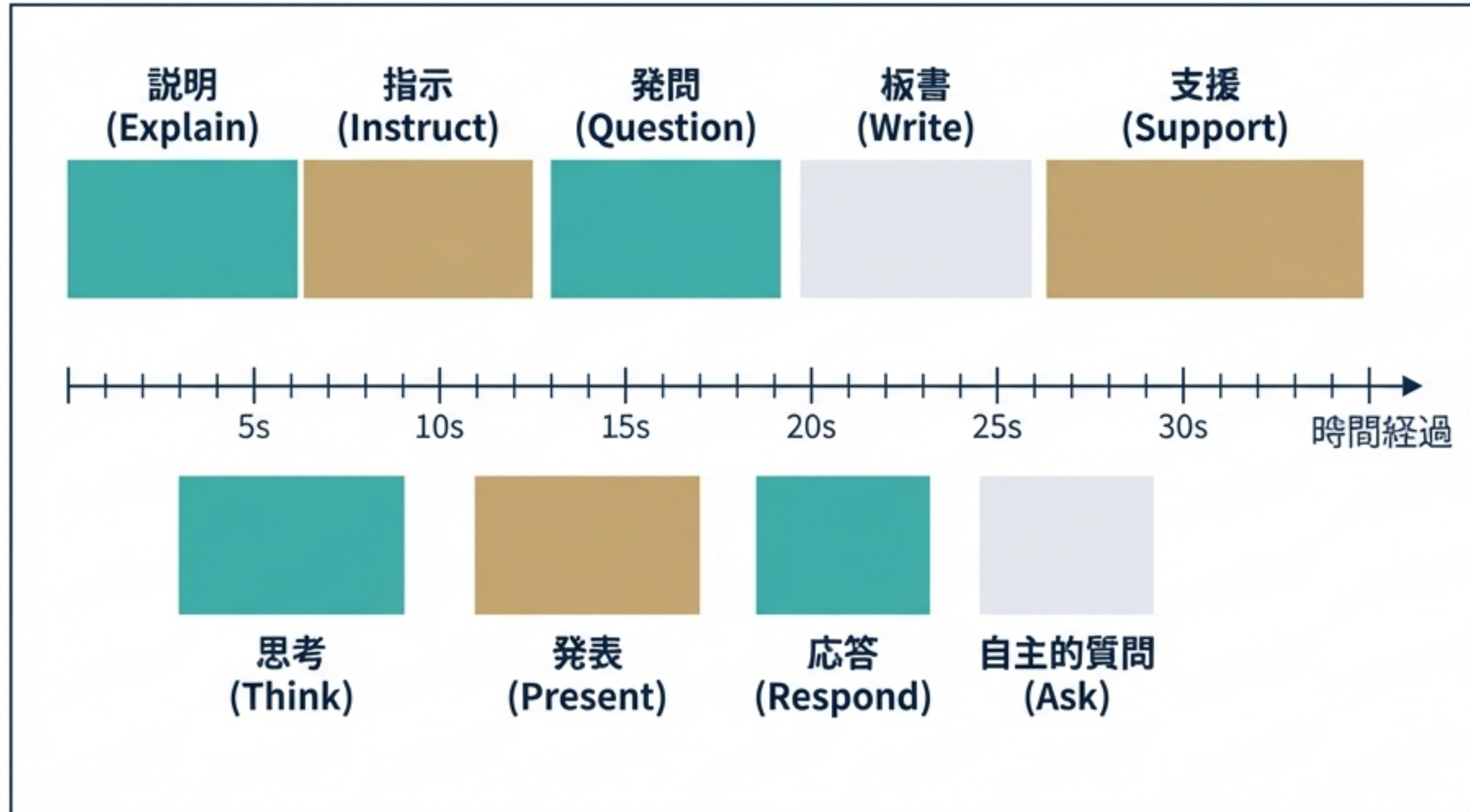
個人 (The Individual)

記述記録 (Written Records)

意図の理解と意味の解釈

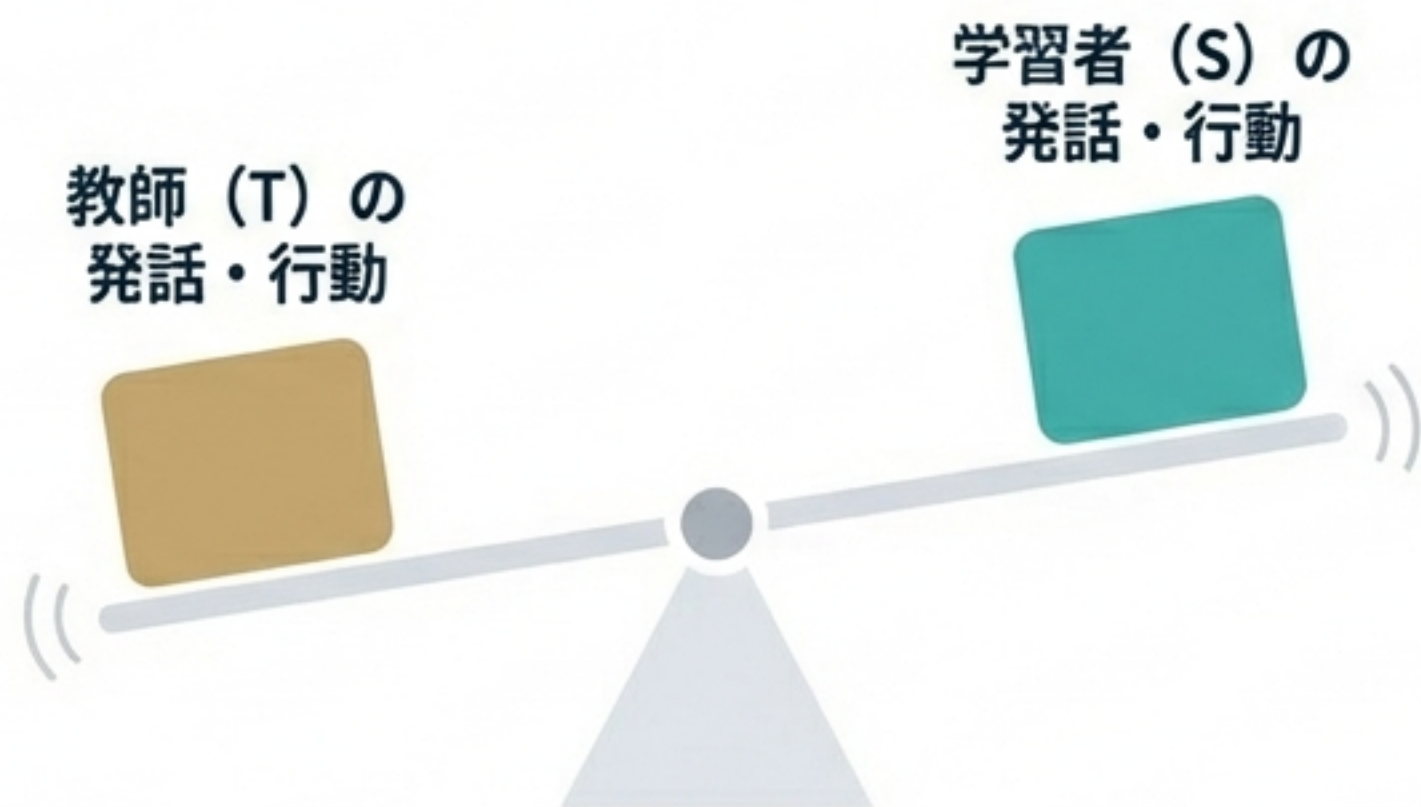
定量手法①：行動分析

5秒ごとのサンプリングで授業の密度を測る



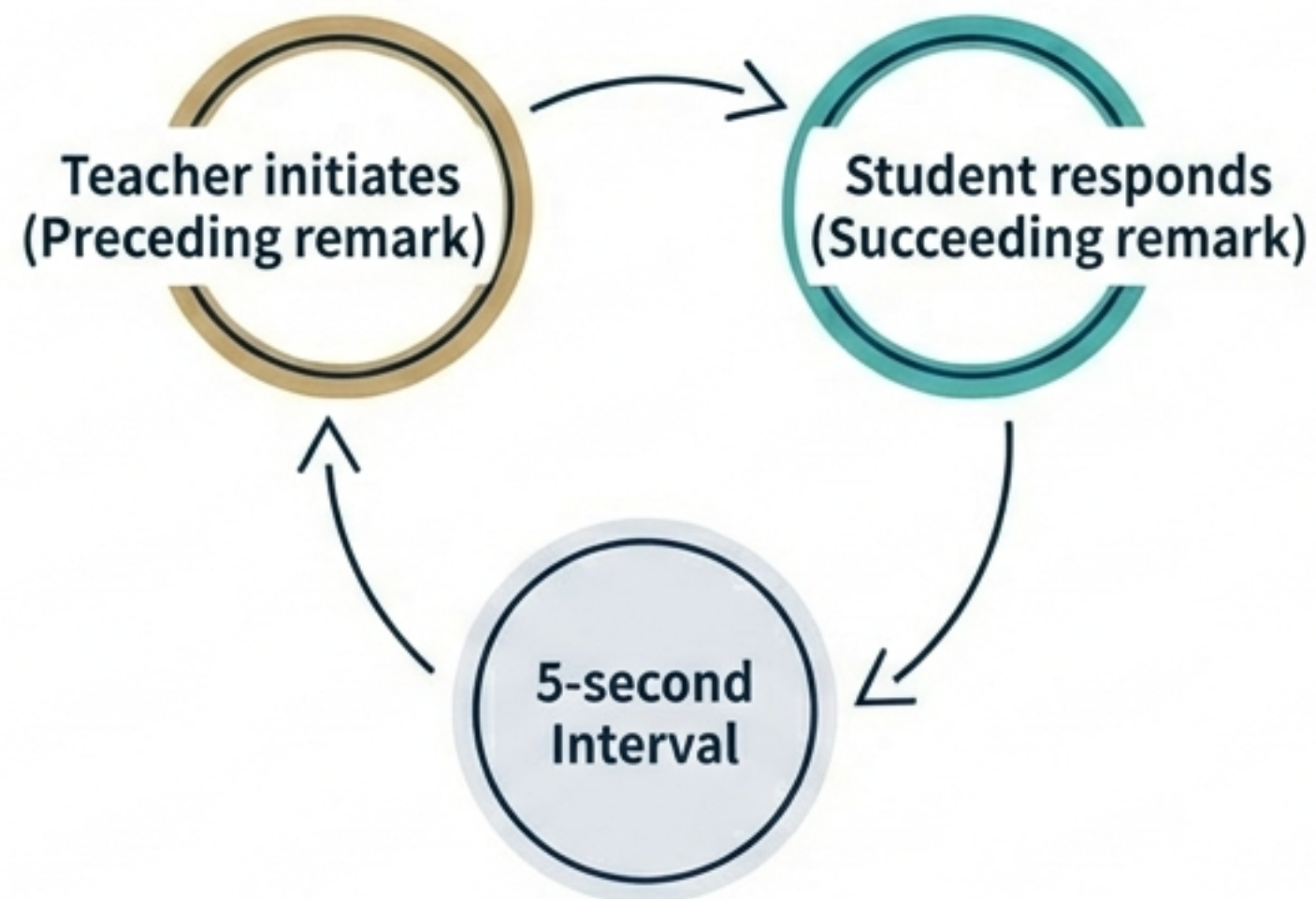
定量手法②：相互作用の分析

S-T分析 (Student-Teacher Analysis)



授業は講義（モノローグ）か、対話（ダイアログ）か？

フランダースの相互作用分析 (Flanders Interaction Analysis)



発言の連鎖から「教室の雰囲気」を明らかにする（1970年代～）

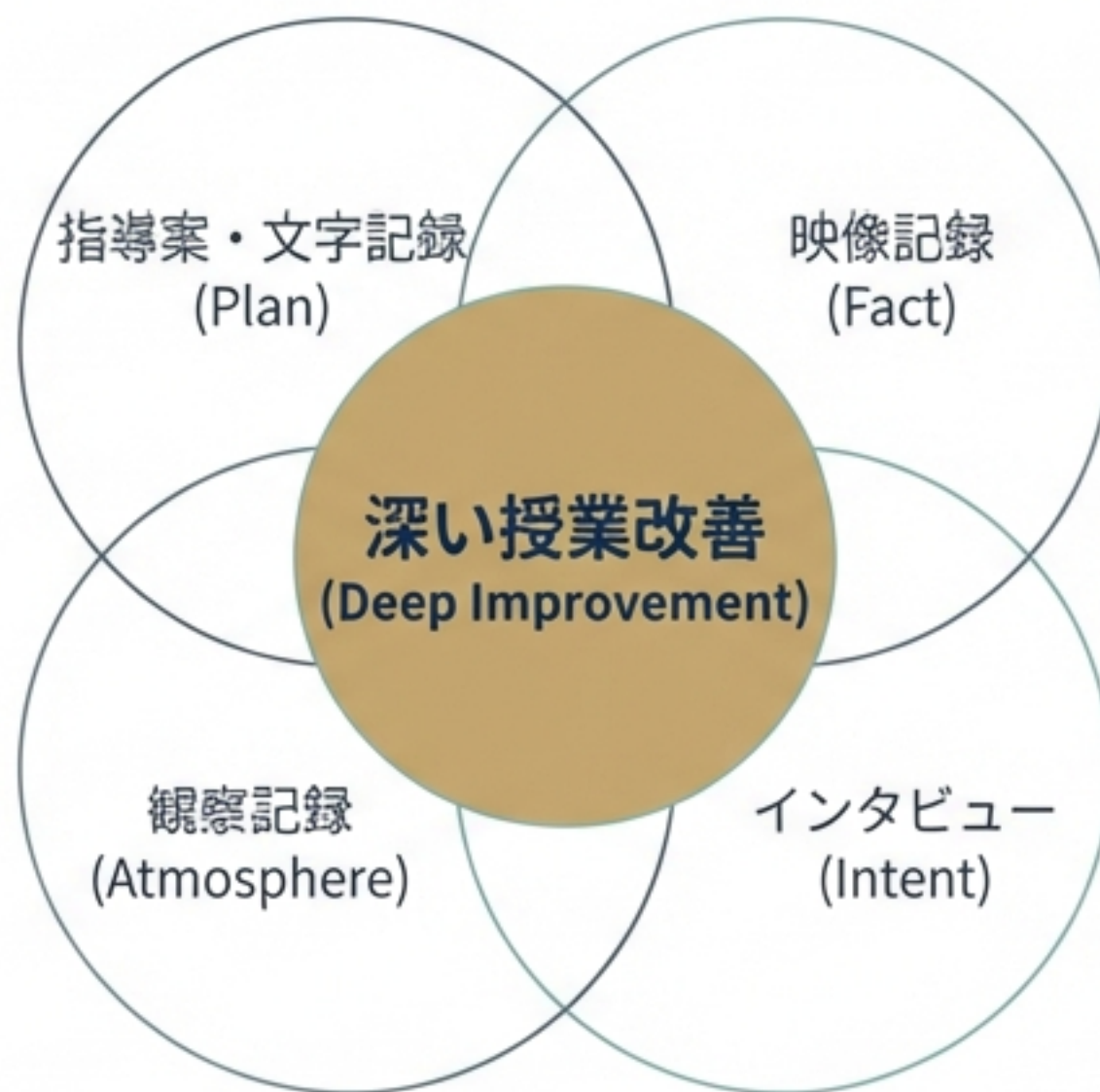
定性手法：非言語活動（ノンバーバル）の分析



分析の目的：これらの非言語活動が、学習者の理解や意欲にどのような効果を与えたかを読み解く。

統合的な分析の重要性

多角的な視点のクロスリファレンス



ひとつの資料だけで判断せず、計画（意図）と事実（映像・記録）を
突き合わせることで初めて課題が見えてくる。

ワークショップ：改善の指標を作る

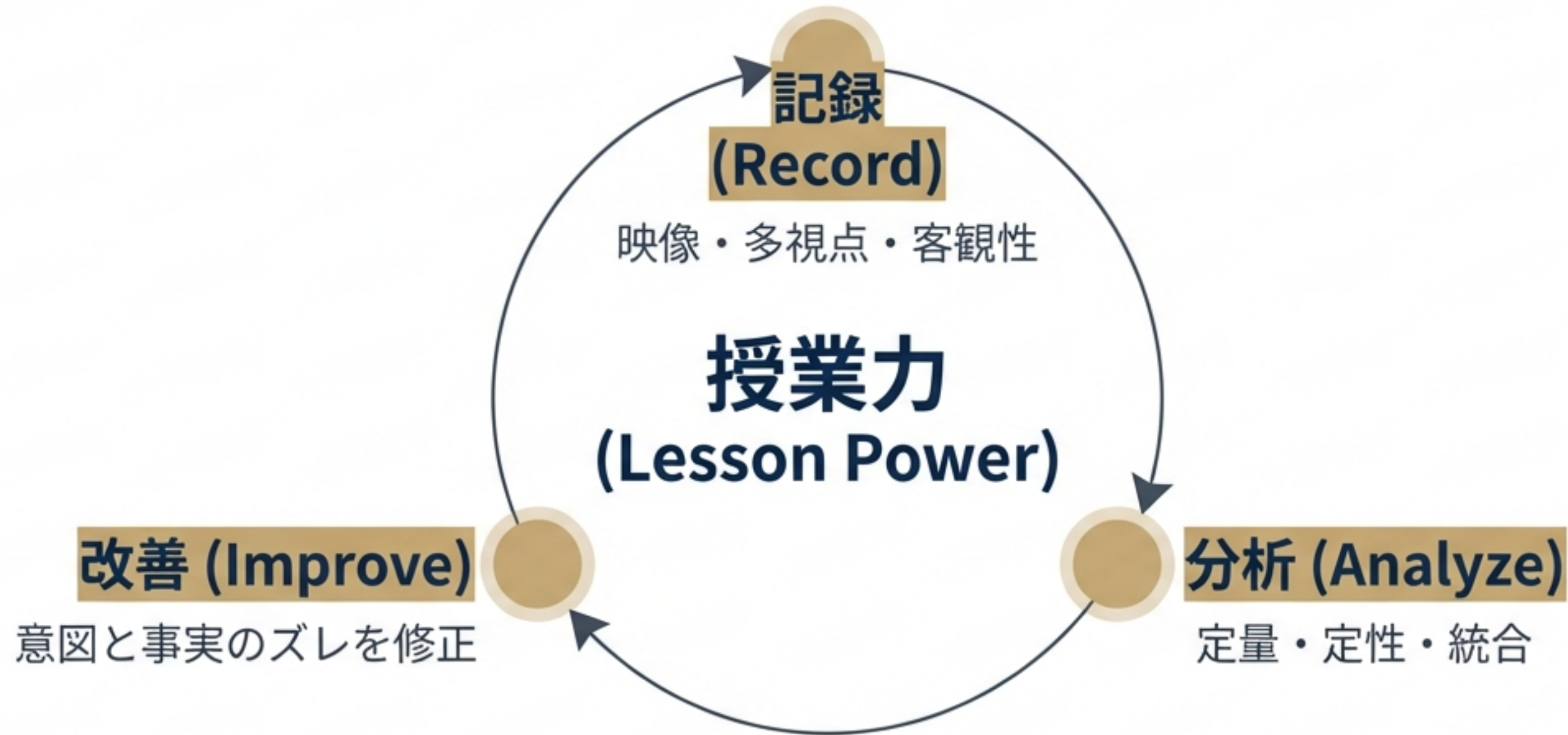
授業改善チェックリスト作成

グループで話し合い、以下の要素を含む独自のチェックリストを作成してください。

- 自己評価の項目（授業者自身の振り返り）
- 観察者の視点（客観的な記述・定量項目）
- 教科・学年の特性（あなたの専門分野における「良い授業」とは？）

「何を良い授業とするか」を言語化することが、改善の第一歩です。

結論：授業改善へのサイクル



授業分析は教員を批判するためではなく、
学習の成立過程を科学的に理解するためにある。